

小田原の遺跡探訪シリーズ2

久野諏訪ノ原丘陵の遺跡

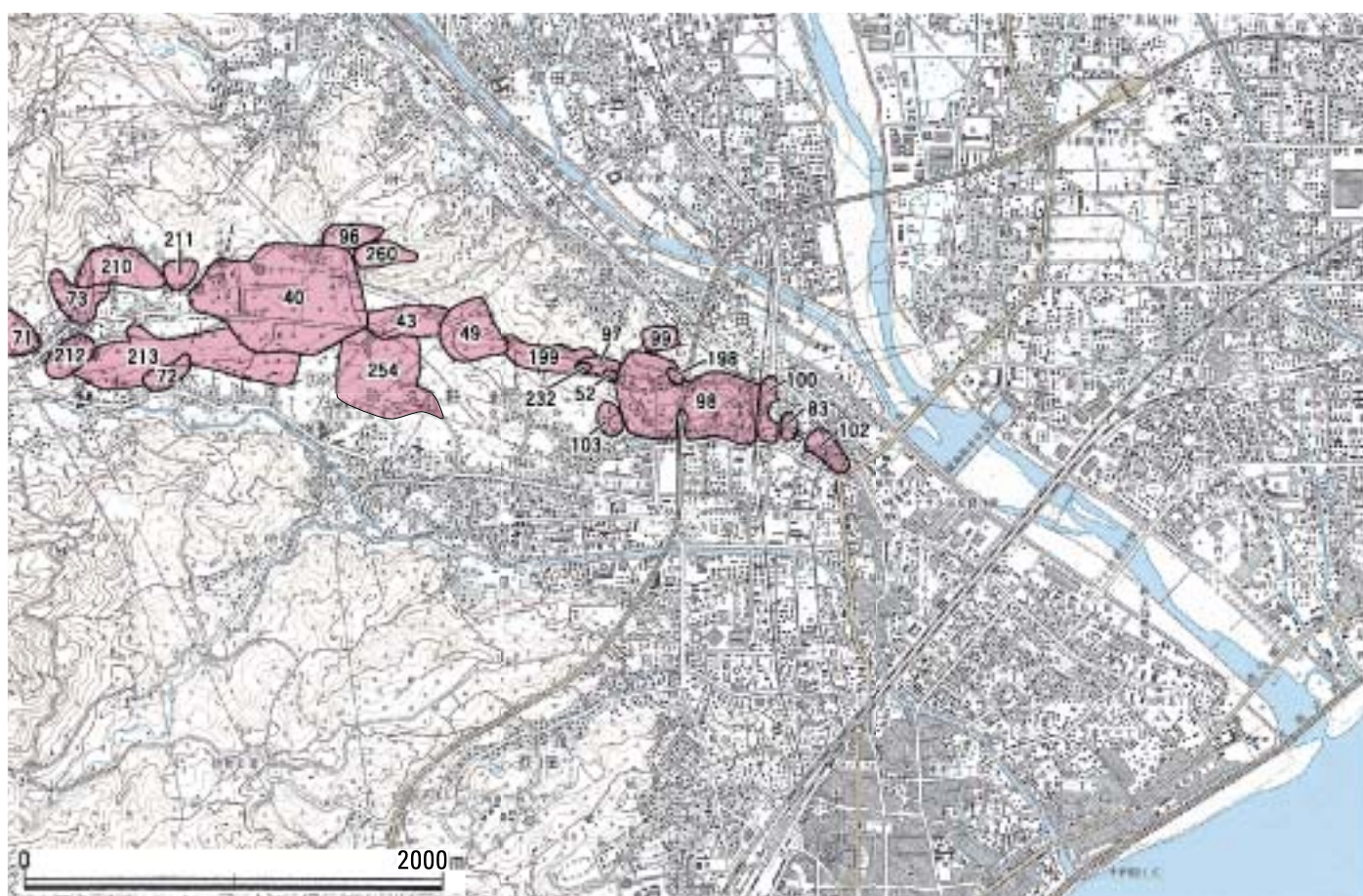
—久野古墳群と周辺遺跡—



小田原市教育委員会

例 言

- 1 本書は散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第2号として、久野諏訪ノ原丘陵周辺（小田原市久野・多古）に位置する遺跡群を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成18年度国庫補助事業である「埋蔵文化財保存活用公開事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。（敬称略・順不同）
戸田哲也・相原俊夫・小林義典（玉川文化財研究所）、滝澤 亮・小池 聡（盤古堂考古学研究所）、植山英史（かながわ考古学財団）、立花 実（伊勢原市教育委員会）、谷口 肇（神奈川県教育委員会）、大島慎一・岡 潔（小田原市郷土文化館）、玉川文化財研究所、盤古堂考古学研究所、（財）かながわ考古学財団、神奈川県教育委員会、小田原市郷土文化館
- 4 本書の作成は、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課佐々木健策が担当者となり、東海大学の田尾誠敏と分担し、小田原市教育委員会生涯学習部文化財課山口剛志・諏訪間 順・小林 隆・渡邊千尋が補佐しました。



第1図 諏訪ノ原丘陵の位置と丘陵上の遺跡（1/5,000、数字は小田原市の遺跡番号）

〔表 紙〕 久野1号墳 〔裏表紙〕 久野2号墳出土、縄文時代後期注口土器

I 小田原市内の遺跡と諏訪ノ原丘陵

1 久野諏訪ノ原丘陵の地形と立地

久野^{く の きゅうりょう}丘陵は、神奈川県小田原市の西側にある丘陵です。久野丘陵とは、箱根外輪山^{はこ ね がいりんざん}から延びる山岳地帯の裾野にあり、久野字諏訪ノ原を中心に東に延びる丘陵を指しています。ほかの尾根と区別して久野^{す わ の はら}諏訪ノ原丘陵・多古^{た こ}丘陵などと呼ばれることもあるため、本書では「諏訪ノ原丘陵」と呼ぶこととします。

諏訪ノ原丘陵の南側には久野川^{く の がわ}が流れ、肥沃な沖積地^{ちゅうせき ち}を作り出しています。また、北から東へは狩川^{かりがわ}が流れ、東側には狩川及び酒匂川^{さ か わ が わ}によって作られた足柄平野が広がっています。諏訪ノ原丘陵は生産地となる沖積地にも近く、自然環境にも恵まれた立地であることから、人々が生活を営むのに大変適した土地柄であることが解ります。

このような諏訪ノ原丘陵では、これまでに24箇所の遺跡が確認され、周知されています（第1図）。そして、これまでの発掘調査で縄文時代（約15,000年前）から近世（約150年前）に至る様々な遺跡が存在することが解ってきました。

2 遺跡から見る小田原の歴史

遺跡とは、昔の人々が生活をしていたことを示す痕跡です。遺跡を調べることによって、昔の人々がその場所でどのような暮らしを営んでいたかということを考えることができます。

主な遺跡から小田原市内の歴史を見ると、市内で最も古い遺跡は八幡山古郭本曲輪^{はちまんやま こ かくほんぐる わ}（小田原市城山）で、後期旧石器時代初頭（約35,000年前）に遡る石器が出土しています。続く縄文時代の遺跡は、諏訪ノ原丘陵で最も多く見つかっていますが、千代遺跡群^{ちよい せきぐん}（小田原市千代）や羽根尾貝塚^{は ね おかいづか}（小田原市羽根尾）などでも確認されています。中でも羽根尾貝塚は縄文時代前期（約5,500年前）の貝塚として著名で、出土遺物（土器・木製品・骨製品など）は神奈川県指定重要文化財となっています。羽根尾貝塚については、既に「小田原の遺跡探訪シリーズ1」として紹介しています。

弥生時代の遺跡は、中里遺跡^{なかざと い せき}（小田原市中里）・国府津三ツ俣遺跡^{こう づ み つまたい せき}（小田原市国府津）などで確認されています。中里遺跡は、現在百貨店が建てられている場所で見つかった遺跡で、東日本最大最古の弥生時代の集落として有名です。また、奈良・平安

諏訪ノ原丘陵は、久野古墳群だけでなく、縄文時代や弥生時代などの遺跡も濃密に分布する小田原市内屈指の大遺跡だったのです。

そもそも諏訪ノ原丘陵に遺跡があるということは、江戸時代の人々にも知られていました。江戸時代後半に記された『新編相模国風土記稿』^{しんぺんさがみのくに ふ ど き こう}には、「久野村」の項に「塚小字諏訪原より留場の辺に至る迄、所々に散在す、都て二十八」と記されています。江戸時代の人々が塚を古墳と考えていたかどうかは分かりませんが、この記述から諏訪ノ原丘陵に28基の塚があったということを知ることができます。また、「多古村」の項には、「城蹟 村の中程山上を云」とも記されているため、何らかの城跡が存在した可能性もうかがい知ることができます。

そして、諏訪ノ原丘陵で最初に考古学的な調査が行われたのは、昭和26年（1951）のことでした。それは、当時文部技官であった齊藤忠氏によって行われた久野諏訪ノ原古墳（久野4号墳）の調査です。それ以来、諏訪ノ原丘陵では日本大学附属三島高等学校の山内昭二氏や県立小田原城内高等学校の杉山幾一氏、久野の郷土史家立木望隆氏らによって数箇所が発掘調査が行われました。皆さんにも馴染みのある場所としては、小田原市環境事業センター（久野諏訪ノ原遺跡第Ⅰ地点）や小田原フラワーガーデン（久野諏訪ノ原遺跡第Ⅲ地点）が建っている場所でも縄文時代の遺跡が見つかっています。また、諏訪ノ原丘陵を東西に通る道路（市道0036号線）の拡幅工事に伴う発掘調査でも、縄文時代や弥生時代、中・近世の遺跡が確認されています。

このように、諏訪ノ原丘陵では数多くの発掘調査が行われ、その度に様々な発見がありました。現在では、こうした度重なる調査によって少しずつ諏訪ノ原丘陵の遺跡の様相が明らかになってきています。



写真1 足柄平野と諏訪ノ原丘陵

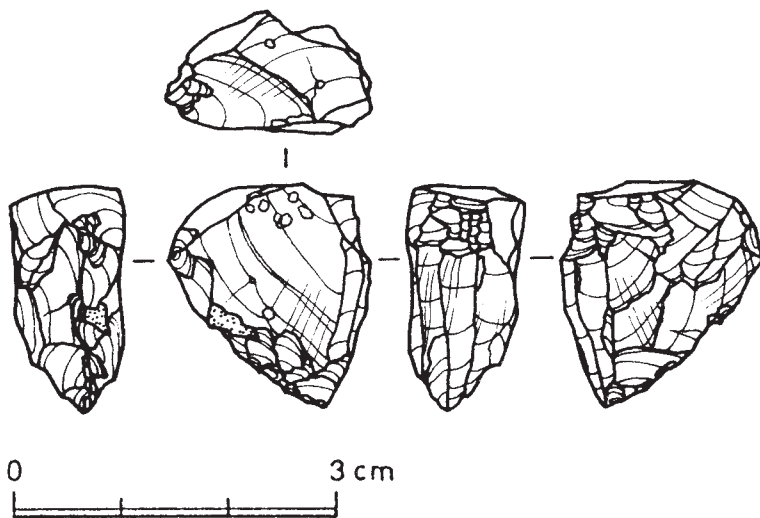
Ⅱ 諏訪ノ原丘陵最古の遺跡

人類の歴史の中で、一番古い時代は旧石器時代と言われています。

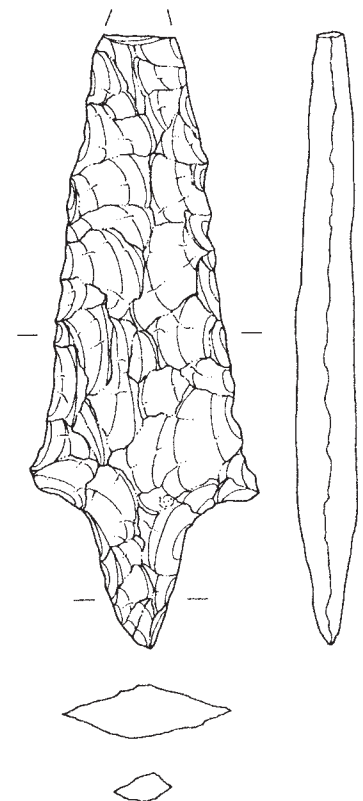
旧石器時代とは、およそ35,000年前～15,000年前まで続いた時代です。当時の人々は、狩猟や採集を中心とし、環境の良い台地で暮らしていました。そして、食糧や資源となる動物・植物などを求め、一箇所に住むのではなく移動しながら生活していたと考えられています。このような生活は、縄文時代の初め頃まで続いていたと考えられています。

諏訪ノ原丘陵は、足柄平野有数の良好な台地です。そのため旧石器時代の遺跡も存在していると考えられますが、今のところ断片的なものしか発見されていません。久野一本松遺跡では、昭和38年（1963）頃に旧石器時代の斧型石器^{おのがたせっき}が関東ローム層から出土したとされています。また、昭和58年（1983）の発掘調査においても黒曜石製細石刃石核^{こくようせきせいさい}が^{せきじんせつかく}発見されました（第2図）。しかし、出土した石器は縄文時代の遺構覆土中から出土したものであるため、旧石器時代の遺物とは断定できませんでした。

そのため、今のところ諏訪ノ原丘陵で最も古い遺跡として位置付けられるのは、縄文時代初頭^{そうそうき}（草創期）^{くのたこざかいせき}の遺物が出土した久野多古境遺跡^{あんざんがん}第Ⅱ地点^{ゆうぜつ}ということになります。ここでは、安山岩製の有舌尖頭器^{せんとうき}が出土しています（第3図・写真7）。この石器が、諏訪ノ原丘陵での人々の生活の始まりを示す最古の遺物です。



第2図 細石刃石核（1/1）



第3図 有舌尖頭器（1/1）

Ⅲ 市内屈指の縄文集落

1 丘陵上に広がる縄文遺跡

諏訪ノ原丘陵は、小田原市内でも屈指の縄文遺跡が発見されている場所です。

これまでに諏訪ノ原丘陵で見つかっている縄文時代の遺跡は、1 万年以上続く縄文時代の全般にわたり、縄文時代草創期（約15,000～9,000年前）から縄文時代晩期（約3,000～2,400年前）までの年代幅があります。そのため発見された住居跡の年代も様々ですが、縄文時代中期を中心に80軒以上の住居跡が確認されています。このことから、諏訪ノ原丘陵には市内最大規模の縄文集落があったことが理解できるのです。

また、前章でも紹介した久野多古境遺跡第Ⅱ地点は、小田原の縄文時代の始まりを伝える重要な遺跡と言えますし、小田原フラワーガーデンの場所で調査された久野諏訪ノ原遺跡第Ⅲ地点も早期（約9,000～6,000年前）から後期（約4,000～3,000年前）の遺物が出土しているため、長期間にわたり人々の営みがあったことを教えてくれる遺跡です。小田原市環境事業センターの位置にある久野諏訪ノ原遺跡第Ⅰ地点で見つかった縄文時代中期の敷石住居跡しきいしじゆうきょしも、当時の住居跡の様相をよく示しています。

2 環境に合わせて動く集落

これまでの発掘調査の成果を見ると、縄文時代早期までの遺跡は丘陵先端部を中心



写真2 久野一本松遺跡第Ⅱ地点出土縄文土器（中期中葉）

に展開していたことが解ります。
先の久野多古境遺跡第Ⅱ地点の石器は、そのことを教えてくれる一例です。

続く縄文時代前期になると、諏訪ノ原丘陵では遺跡の数が少なくなります。おそらく温暖化による生活環境の変化で、人々は丘陵から羽根尾貝塚のような低地へと活動の場を移していたものと考えられます。

その後、中期になると再び諏訪ノ原丘陵上が人々の生活の舞台となり、久野坂下窪遺跡では中期初頭（五領ヶ台式）の住居跡が見つかっています。また、大規模な環状集落が営まれたとされる中期から後期初頭には、久野一本松遺跡を中心に集落が営まれていたようです。

しかし、後期になると再び丘陵上の遺跡数は減少し、丘陵の麓に位置する久野北側下遺跡などで柄鏡形敷石住居跡が発見されています。縄文時代後期の海退によって、丘陵上で水を確保できなくなった人々が再び丘陵を降りて生活を始めたためと考えられます。

これらのことから、縄文時代の人々は環境の変化に合わせ、縄文時代草創期には諏訪ノ原丘陵先端部に集落を形成し、前期には一度低地に移りますが、再び中期から後期初頭にかけて諏訪ノ原丘陵周辺での生活を始めたものと理解できます。

このように、それぞれの遺跡の内容や立地を考えることで当時の人々の生活の一端を垣間見ることができるのです。



写真3 久野一本松遺跡第Ⅱ地点全景（西から）

く の さかしたくほ い せき え かみ が たしき いしじゅうきよ

3 丘陵を縦断する市道拡幅に伴う調査 — 久野一本松・北久保上遺跡 —

縄文時代の遺跡は、諏訪ノ原丘陵を東西に走る市道0036号線を敷設する際に行われた発掘調査でも明らかになっています。市道0036号線は、諏訪ノ原丘陵の尾根を貫く全長2.1kmの道路です。以前は幅2 mほどの農道でしたが、地元の人たちの要望により道幅を拡幅することとなったため、工事に先立って発掘調査が行われたのです。

発掘調査は、昭和58年（1983）から試掘調査が行われ、道路に沿うようにして78箇所しきつこうの試掘坑を設けて遺跡の詳細な分布状況を調べる調査が行われました。その結果、縄文時代の遺構や遺物は29箇所しきつこうの試掘坑から発見され、諏訪ノ原丘陵の尾根筋にどのように遺跡が分布しているのかを確認することができました。そして、この時に久野一本松遺跡いっぽんまつ いせきには、濃密に縄文時代の遺跡が分布していることが明らかになったのです。

久野一本松遺跡とは、縄文時代早期（約9,000～6,000年前）から後期（約4,000～3,000年前）の遺跡です。この遺跡の存在は、終戦直後の昭和21年（1946）頃に注目されるようになります。それは諏訪ノ原丘陵が食糧増産のために耕地となったことや、柑橘類かんきつるいの栽培が急速に普及したことがきっかけでした。丘陵平坦地の土地が次々に耕作され、そのために地中に眠っていた土器や石器が地表へと現れてきたのです。

これらの遺物は地元の郷土史家などによって採集されましたが、この時に採集された遺物の一部は、小田原市郷土文化館にも収められています。

そして、本格的な発掘調査が行われたのは、昭和50年（1975）のことでした。それ



写真4 久野一本松遺跡第Ⅱ地点出土縄文土器（中期後葉）

は送電線の鉄塔を建て替える際に行われた発掘調査です（久野一本松遺跡第Ⅰ地点）。

この時の調査は、対象面積が狭かったこともあり、住居跡などの遺構は見つかりませんでしたが、^{かつさかしき}勝坂式、^{か そ り}加曽利E式、^{ほりのうち}堀之内式、加曽利B式といった縄文時代中期から後期にかけての土器や石器が出土しました。



写真5 久野一本松遺跡第Ⅱ地点出土石器

その後も久野一本松遺跡では、試掘調査の結果を参考に平成3年（1991）に本格調査が行われ（久野一本松遺跡第Ⅱ地点）、また、隣接する久野北久保上遺跡でも平成16年（2004）に発掘調査が行われました（久野北久保上遺跡第Ⅰ地点）。これらの発掘調査の結果、久野一本松・北久保上遺跡では70軒近い住居跡と10箇所の^{うめかめ}埋甕が発見されたのです。これほどまでに住居跡が集中している理由としては、この辺りが陽当たりも良く平坦で、住む場所としては絶好の場所だったためということが考えられます。

また、久野一本松・北久保上遺跡とほぼ同じ時期の遺跡として、久野諏訪ノ原遺跡



写真6 久野一本松遺跡第Ⅱ地点出土縄文土器（後期前葉）

があります。この遺跡では、前述した環境事業センターやフラワーガーデンを建設する際の発掘調査で興味深い成果が挙がっています。この場所は諏訪ノ原丘陵の中で最も平坦面が広く、生活しやすいような場所ですが、実は住居跡は1軒しか見つかっていません。

しかし、広い範囲で土器や石器などの遺物が出土しているため、久野一本松遺跡で見つかった住居



写真7 久野多古境遺跡第Ⅱ地点出土石器

で生活をしていた人々が、狩猟・採集を目的に久野諏訪ノ原遺跡周辺で活動していたのではないかと考えることができます。

このように、諏訪ノ原丘陵に住む縄文時代の人々は、環境に応じて生活場所を移しながらも、縄文時代中期には久野一本松遺跡を中心に小田原市内でも最大級の集落を形成しました。また、久野諏訪ノ原遺跡周辺では、広く狩猟や採集活動を行っていた可能性が高いことが解りました。これらの遺跡の調査からは、縄文時代の人々が自然環境と共存しながら上手に暮らしを営んでいたことを知ることができるのです。



写真8 久野北久保上遺跡第Ⅰ地点出土埋甕（縄文中期）

Ⅳ 丘陵南面に広がる方形周溝墓群

1 弥生時代中期後葉の墓域

方形周溝墓^{ほうけいしゅうこうぼ}とは、弥生時代から古墳時代にかけて見られる墳墓^{ふんぼ}の一形態です。一辺が5m～15mほどの方台部を造って遺体を埋葬し、そのまわりに溝を巡らせて囲ったものです。これまでに日本で見つかった最大規模のものには、大阪府加美遺跡^{かみいせき}で一辺が30mにもおよぶものがあります。

方形周溝墓にどのような人々が埋葬^{まいそう}されたかについては様々な説がありますが、関東地方の方形周溝墓の方台部には埋葬施設が1箇所しか確認できないのに対して、近畿地方では2箇所以上の埋葬施設が確認できるものがあるため、方形周溝墓は夫婦を基本とした家族の墓であるとも考えられています。

方台部を囲む周溝は、弥生時代後期になると周囲を取り巻き、1箇所の通路を設けるものが普通ですが、弥生時代中期の方形周溝墓は独立した4本の溝でそれぞれの辺



写真9 久野山神下遺跡第Ⅶ地点方形周溝墓群（西から）

を造って、四隅が途切れる場合がほとんどです。方形周溝墓同士が重なり合わずに群集するという点も同時期の方形周溝墓であることを示す特徴のひとつです。

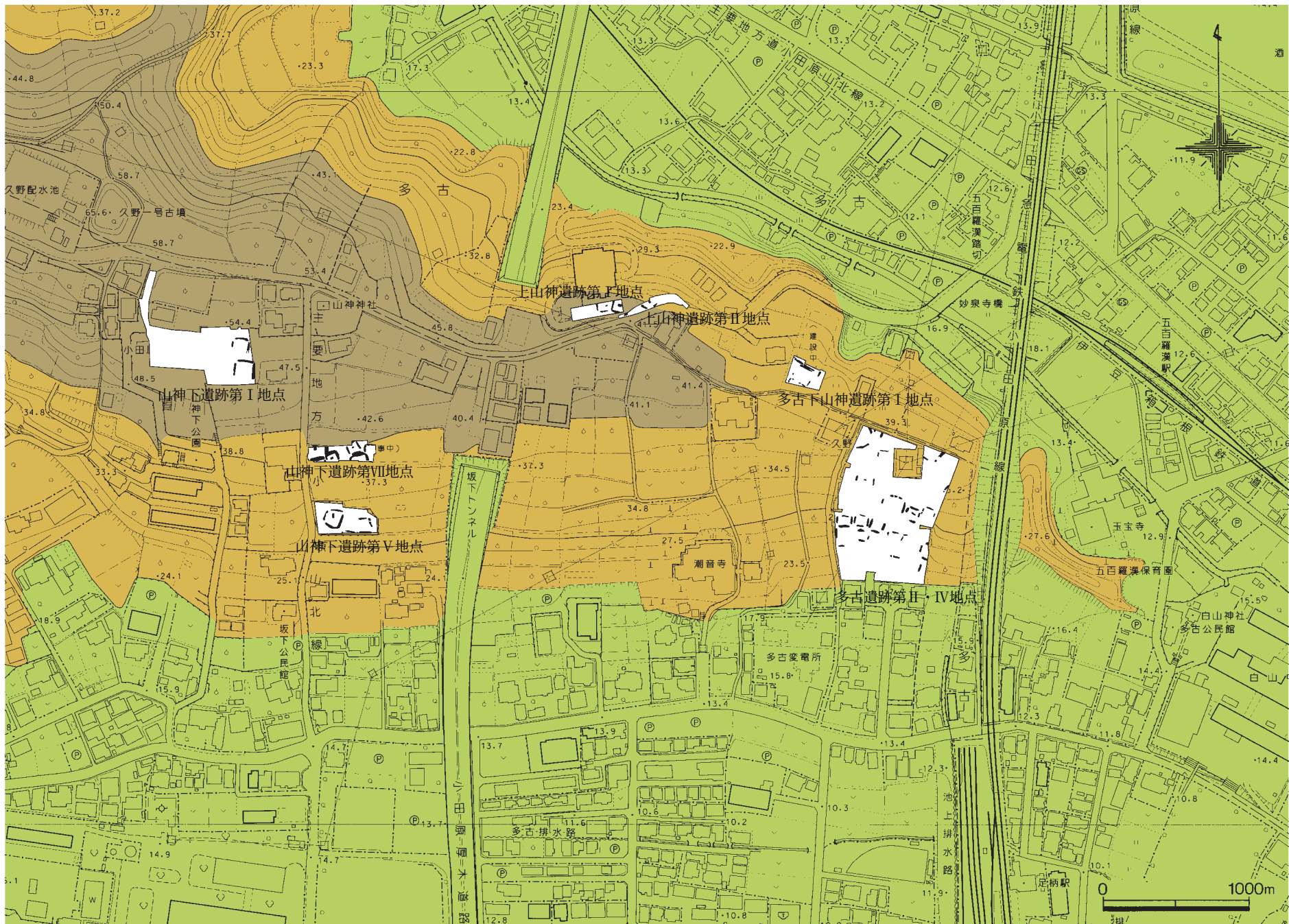
諏訪ノ原丘陵上で発見される方形周溝墓は、弥生時代中期後葉に位置付けられる宮ノ台式期（約2,000～1,850年前）の遺構です。また、出土した土器は宮ノ台式期の中でも古い段階にあたると言われています。小田原市内では、中里遺跡で弥生時代中期中葉の須和田式期にあたる方形周溝墓群が見つっていますが、この方形周溝墓がこれまでのところ東日本で最も古い方形周溝墓と言われています。

諏訪ノ原丘陵上で確認されている方形周溝墓は、この中里遺跡方形周溝墓群の次の時代に造られたものです。市内では千代遺跡群や国府津三ツ俣遺跡で、諏訪ノ原丘陵よりも新しい弥生時代後期から古墳時代初頭の方形周溝墓群が発見されていますが、諏訪ノ原丘陵と同じ弥生時代中期後葉の方形周溝墓は大変珍しく、神奈川県内でも最も西側に位置するものとなっています。

なお、宮ノ台式期の方形周溝墓群からは遺物はあまり出土しません。しかし、周溝からは完全な形の土器が発見される場合があります(写真10)。これは方台部で埋葬時や埋葬後に祭祀を行なったためで、祭祀に使われた土器が周溝の中に落ち込んだためとも考えられています。中には記号が書かれた土器なども出土します(写真11)。



写真10 久野多古境遺跡第Ⅳ地点出土土器



第4図 諏訪ノ原丘陵の方形周溝墓分布図（1/5,000）

2 弥生時代の集落

諏訪ノ原丘陵では、これまでの発掘調査で約30基の方形周溝墓が発見されています。この時期のものは、およそ5基から20基程度が群集する傾向があるとされていますので、諏訪ノ原丘陵の方形周溝墓群が当時のものとしては有数の規模を持っていたとことが理解できます。また、方形周溝墓の数が多いということは、その方形周溝墓を造営した人々が住む集落の規模も大きかったのではないかと想像することができます。



写真11 久野山神下遺跡第Ⅰ地点出土線刻文土器

では、これらの方形周溝墓に葬られた人々が住む集落は、どこにあったのでしょうか。これまでのところ、諏訪ノ原丘陵では、弥生時代中期の住居跡は僅かに^{くのやまがみした}久野山神下遺跡第Ⅲ地点^{いせき}などで確認されている程度で、はっきりとは見つかりません。この久野山神下遺跡の住居跡も方形周溝墓と重なり合って見つかりしていることから、方形周溝墓に葬られた人々が暮らした住居ではないことが解ります。

最近の調査で、諏訪ノ原丘陵東端の^{たこはくさんいせき}多古白山遺跡第Ⅰ地点^{かんごう}で環濠と思われる溝が発見されました。環濠とは集落を取り囲む堀のようなもので、弥生時代中期から後期にかけて外敵から集落を守るために造られたと考えられています。環濠の存在は、その内側に集落が存在した可能性を想定する根拠の一つとなります。また、生産地となる沖積地が南に広がっていたことを考えると、丘陵南側の麓に集落が形成されていた可能性も十分に考えられます。

このような立地から、沖積地で作物を作り、丘陵の麓や先端部には集落を、そして丘陵斜面に方形周溝墓を築くという、当時の人々の生活環境を想像することができます。中には須和田式期の土器が見つかりている遺跡もありますので、諏訪ノ原丘陵の人々と中里遺跡の人々が、親密に交流していた可能性も考えることができます。

しかし、これほどまでに多くの方形周溝墓を造った人々の集落が、きちんと確認できないというのは、諏訪ノ原丘陵の歴史の中でも大きな謎の一つです。



V 久野古墳群と師長の豪族

1 久野古墳群の調査

諏訪ノ原丘陵には、戦前「久野百塚」や「久野九十九塚」と言われるほど、多くの古墳が点在していました。昭和58年（1983）の市道0036号線拡幅工事に伴う事前調査の際には、39基の古墳が確認されています。また、近年小田原市教育委員会が行った調査では、約120基の古墳があったものと想定されています（第7・9図）。

諏訪ノ原丘陵の古墳には、塚状の高まり（高塚）が残るものもありますが（写真13）、既に墳丘が削られ、周溝も埋まってしまったために発掘調査を行なった結果、始めて確認されるものもあります。そのような状況を考えると、諏訪ノ原丘陵に分布した古墳の数は更に多かったものと推測できます。

久野古墳群の中で、一際目を引くのが「王塚」「百塚の王」とも称される久野1号墳です。久野1号墳については、本格的な発掘調査は行われていないため、詳細は解っ

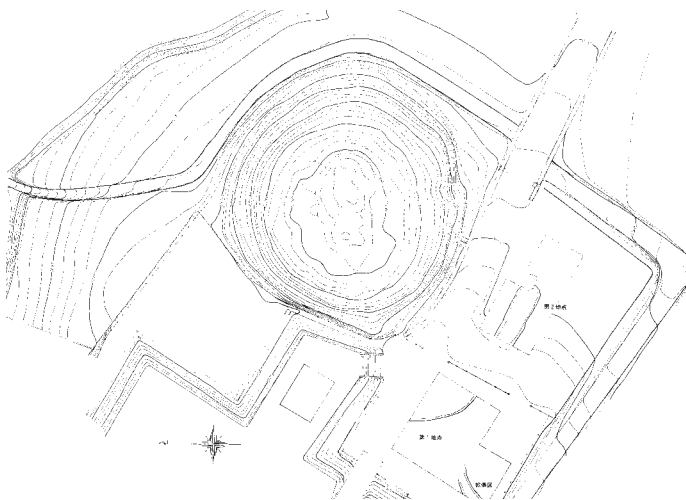


写真12 久野1号墳現況（南から）

ていませんが、近接する久野坂下窪遺跡^{くのさかしたくぼいせき}で幅約12mの周溝が確認されていますので、現在の久野1号墳（墳丘の直径39m、高さ5.9m）と周溝を含めた最大径は60mを越える規模であったと推定されます。円墳としては神奈川県内最大級の規模です。

久野古墳群の中で実際に墳丘の調査が行われ、その構造が明らかになった最初の古墳は久野4号墳です。昭和25年（1950）から始まった農道敷設工事では、多くの古墳が壊されていきました。そのような様子を見た地元の人たちは古墳の保護を訴え、「久野遺跡保存会」を作ります。そして、文部技官であった斉藤忠氏らによって昭和26年・27年に学術調査が行われることとなったのです。その後、久野諏訪ノ原古墳群では2号墳・15号墳（旧6号墳）・16号墳（地点不明）・総世寺裏古墳と4基の高塚を持つ古墳の調査が行われています。

久野4号墳は葺石^{ふきいし}を持つ古墳で、横穴式の石室も確認されています。石室は1.5m



第6図 久野1号墳測量図（1/1,500）



写真13 周辺に残存する高塚（南東から）



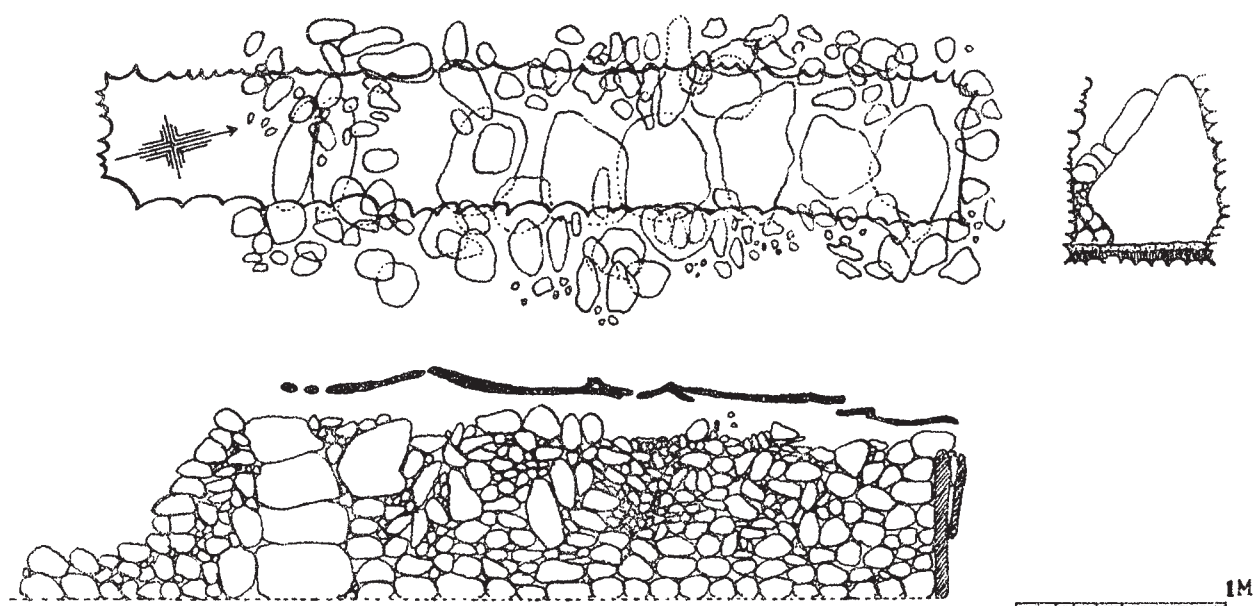
第7図 諏訪ノ原丘陵西側の古墳分布図（1/12,000）



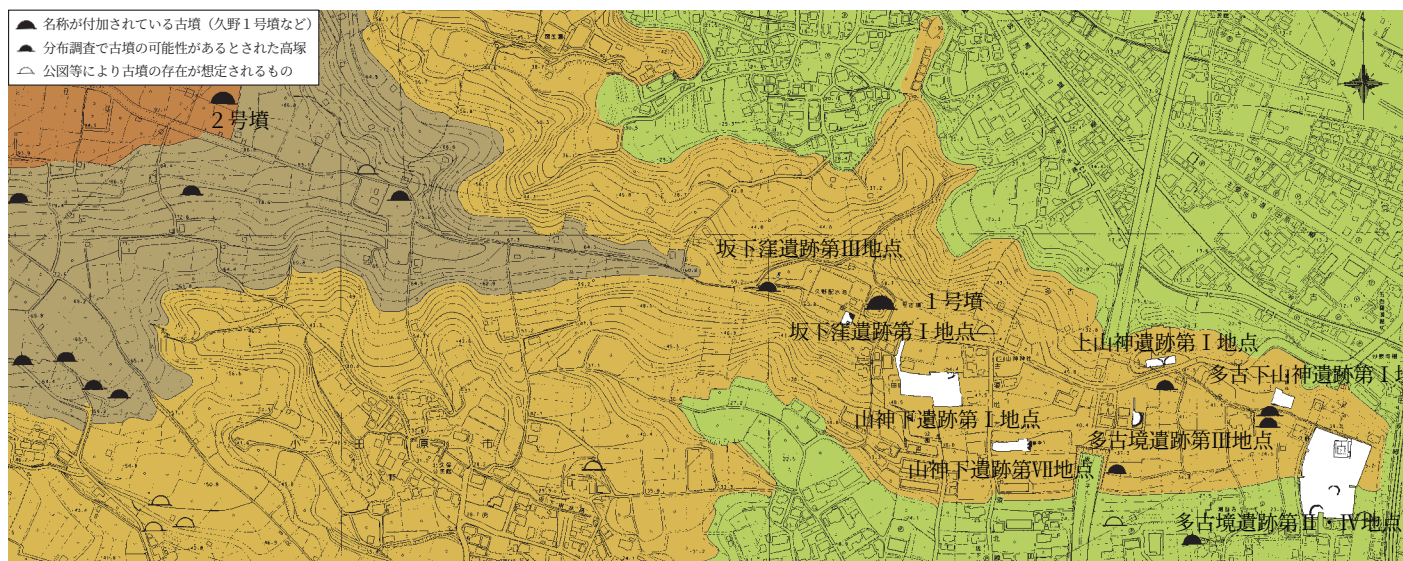
写真14 久野3号墳現況（北東から）



写真15 久野4号墳現況（南西から）



第8図 久野4号墳石室実測図（1/50）



第9図 諏訪ノ原丘陵東側の古墳分布図（1/12,000）

×7mの規模を有し、1mの長さの
^{せんどう}羨道が付随しています(第8図)。床
 面には板状の石が敷かれ、^{おくへき}奥壁は扁
 平な1枚石、側面には大小様々な石
 が用いられていました。発掘調査を
 実施した際、既に天井は崩落してい
 ましたが、^{はじき}土師器や^{すえき}須恵器とともに
^{てつぞく}鉄鏃・^{とうす}刀子などの鉄製品27点、^{まがたま}勾玉
 ・^{くだたま}管玉・^{なつめだま}棗玉などの玉類84点の^{ふくそう}副葬
^{ひん}品が出土しています。現在、この古
 墳は石室が見学できるように復元さ
 れ、出土遺物は小田原市郷土文化館
 に展示されています。

久野2号墳の発掘調査は、平成4
 年(1992)に行われました。ここで
 は、大型の河原石を小口に積んだ横
 穴式石室が検出されています。^{へいそく}閉塞
^ぶ部は石室側に仕切り石を用い、^{げんしつ}玄室
 と羨道の区別はありませんでした
 が、床には10cm～40cmの大きさの石
 が敷かれていました。石室からは、
 粉末状になった人骨とともに^{てつせいぎん}鉄製銀
^{ぞうがんとうらんがたつばつき}象嵌倒卵形鐔付大刀や^ち喰出鐔を持
^{こんどうそうそうしよく}つ金銅装裝飾大刀を含む4振の大
 刀と刀子4点・鉄鏃26点などの鉄製
 品、玉類117点、耳環9点、土師器
 ・須恵器などが出土しています。

この鉄製銀象嵌倒卵形鐔付大刀に
 は、多くの付属品がありました。特
 に鐔は倒卵形の^{はっそうしき}八窓式で、表・裏面



写真16 久野2号墳現況(東から)



写真17 久野2号墳出土玉類



写真18 久野2号墳出土鉄製銀象嵌倒卵形鐔

の周縁部には小型の渦卷文、窓と窓の間にはだ えんうずまきもん 櫛円渦卷文、窓の内側にはえん こもん 円弧文、そして側面には小さな半円をモチーフとした銀象嵌が施されています。また、金銅装裝飾大刀はほぼ完全な形で、刀身には鐔、柄間、鞘口、蕨手状の文様のある鞘間の各金具と鞘材の木質、圭頭式柄頭と柄尻が残っています。久野2号墳からの出土品は、副葬品としては多くはありませんが、豪華な品々が含まれていることから足柄平野を治めた有力な人物の古墳であろうと考えることができます。

久野4号墳・2号墳のように、発掘調査の詳細な記録によって古墳の規模や内容がよく解っている古墳がある一方で、大半の古墳についての詳細は解っていません。諏訪ノ原丘陵上には、現在でも古墳とは断定できない高塚が多数残っています。久野1号墳の周辺には、以前は多くの高塚があったと言われていたのですが、現在は2基程度の高まりが確認される程度となっています(写真13)。また、2号墳と4号墳との間には久野3号墳が位置していますが、これまでのところ考古学的な調査は行われていないため、正確な内容は解っていません。3号墳の周辺にも小さな円墳がいくつもあったようですが、残念ながらこれらの高塚の大半は、農地の開墾や農道の建設のために削平されてしまいました。現在、諏訪ノ原丘陵の各所でくようとう 供養塔や石碑を見ることができますが、これらの石碑は失われた古墳の主を供養するために建てられたものです。

久野15号墳は、石室の様子が分かるように復元された古墳です。昭和33年(1958)に発掘調査が行われましたが、当時の記録が充分残っていないため、正確な調査成果は不明です。断片的な記録によると、石室から須恵器横瓶・甕や直刀・鉄鐔が出土したようです。小田原市郷土文化館には、久野15号墳から出土したとされる、須恵器横瓶・ちようけいへい 長頸瓶・広口壺、鉄鏃・刀子、まるだま 丸玉・こだま 小玉などが収められています。



写真19 久野2号墳出土金銅装裝飾大刀(上)と銀象嵌倒卵形鐔付大刀(下)



写真20 久野15号墳現況（南東から）

なお、現在では久野1号墳より東側で明確な高塚を確認することはできませんが、本来は丘陵先端部にまで古墳の分布域は広がっていたと考えられます。発掘調査では、久野多古境遺跡で円形の溝が3条見つっています。この円形の溝は、直径が約15m～21mありますが、これは古墳の名残を示す周溝と考えて間違えないでしょう。

また、視点を西に移すと、諏訪原公民館が建っている場所でも古墳の痕跡が確認されています。ここでは古墳周溝と考えられる溝2条と石室の一部と思われる遺構が発見されています。実は、諏訪原公民館はこれらの遺構を保護するために、当初の計画よりも南側に位置をずらして建てられています。現在に生きる私達と過去の遺跡との共存が図られている一例です。

そして、そのすぐ隣に位置するのがそうせいじうらこふん総世寺裏古墳です。この古墳は、広域農道の建設工事中に石室が発見され、昭和56年（1981）に神奈川県教育委員会によって発掘調査が行われました。

既に墳丘は失われていましたが、以前は高塚が残っていたようです。

石室だけの調査であったため、古墳の形や規模は解っていませんが、石室の残りが

良かったため、全部で5体の遺体が埋葬されていたことが解りました。また、遺体の埋葬状況や性別・年齢から、家父長^{かふちやう}の夫婦を中心に2世代が埋葬されたものと考えられています。副葬されていた出土遺物は、土師器・須恵器のほか、玉類や耳環^{じかん}、大刀などの鉄製品、銅鏡^{どうわん}などがありました。

中でも銅鏡の存在は特筆すべきものです。古墳や横穴墓の副葬品として出土した銅鏡は、総世寺裏古墳の例を含めても神奈川県内で8例しかありません。銅鏡は、地方で簡単に作ることのできない製品なので、銅鏡を手に入れることができた被葬者は有力な豪族であったと言えます。

久野古墳群には、1号墳から16号墳、20号墳の番号が付けられていますが、現在その所在が確認できるのは1・2・3・4・15・20号墳の6基だけです。古墳の番号が付けられてからも、総世寺裏古墳のようにいつしか墳丘が削られ、その所在が不明となってしまった古墳があるので、16号墳は、発掘調査が行われたにもかかわらず、現在はその場所を確認することができない幻の古墳となってしまいました。



写真21 久野15号墳出土須恵器

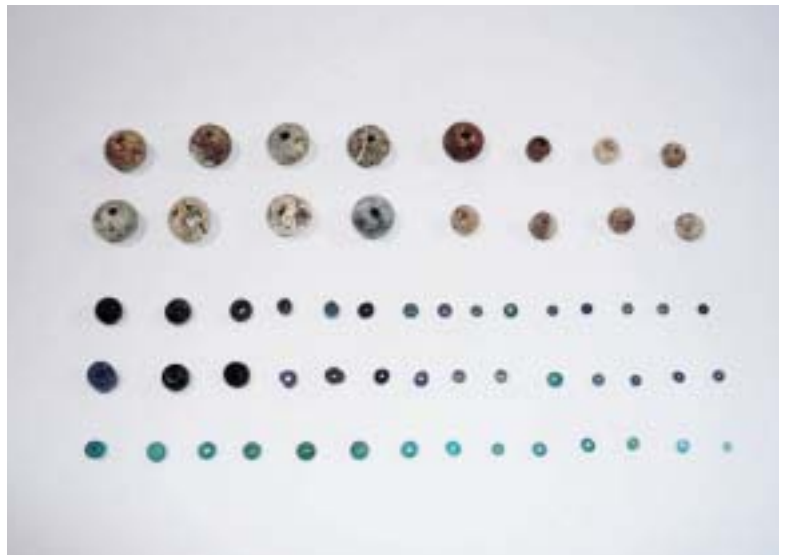


写真22 久野15号墳出土玉類



写真23 久野15号墳出土鉄製品

2 師長の豪族

古墳時代後期の相模地方（神奈川県から横浜市と川崎市を除いた部分）には、大きく3つの豪族勢力がいたと考えられています。それぞれの豪族は、近畿地方のヤマト王権から命じられて、国造という地方官に任じられました。

足柄平野から大磯丘陵・秦野盆地にかけては、師長^{しなが}国造のクニでした。南足柄市から小田原市にかけての丘陵上には多くの古墳が分布していることを見ると、師長国造は足柄平野の西側にその拠点を置いていた可能性があります。

これらの古墳からは様々な副葬品が出土し、その古墳に埋葬された人物の権力や財力を表しています。副葬品のランクを見ると6世紀には南足柄市の古墳が優勢ですが、7世紀には久野古墳群の方が優位に立ちます。7世紀には久野古墳群に埋葬された人々が足柄平野で最も力のある豪族となっていたのでしょう。

足柄平野からは久野1号墳の姿がよく見えます。久野1号墳は、足柄平野を治めた王の墓として相応しい立派なものと言えます。



写真24 総世寺裏古墳現況（南東から）

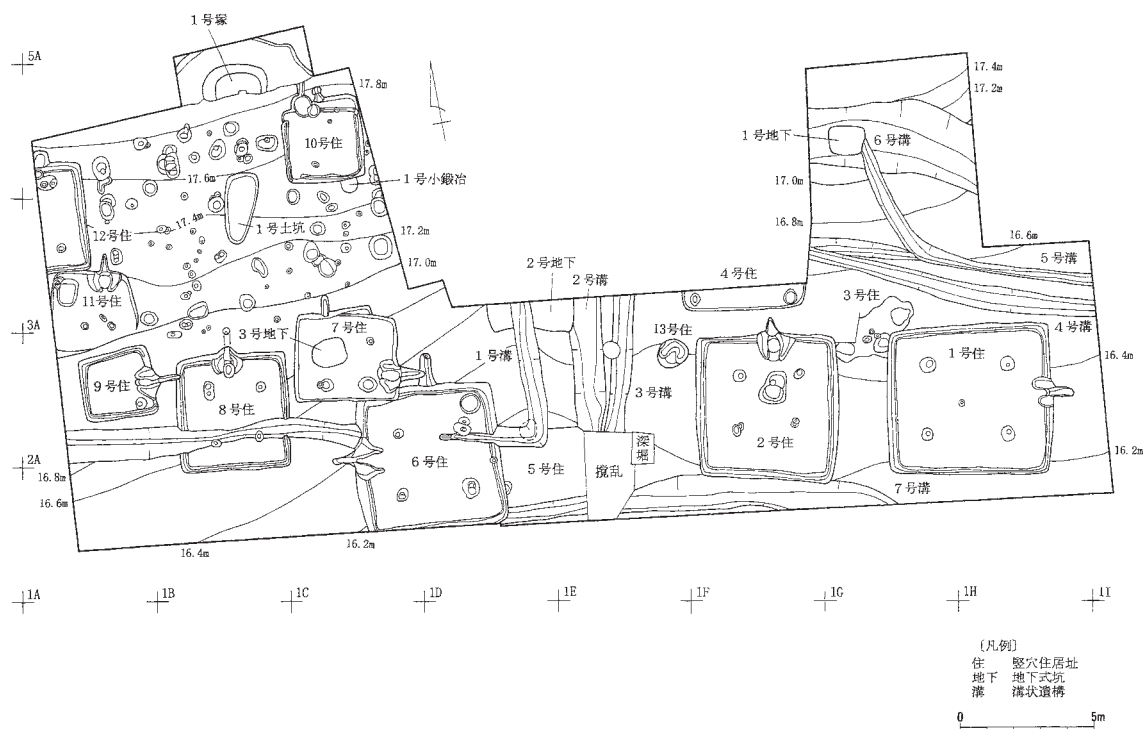
Ⅵ 古代のムラ

1 集落の位置

^{ごうぞく}豪族の古墳と住まいが同じ場所に造られることはありません。では、諏訪ノ原丘陵の古墳を営んだ人たちは、どこに住んでいたのでしょうか。

今のところ神奈川県内で豪族居館^{きょくあん}が見つかった遺跡はありませんが、諏訪ノ原丘陵の東の裾部にあたる久野多古境遺跡では、古墳時代後期～平安時代にかけての住居跡が21軒見つかっています。南側の丘陵中段に位置する久野蓮光地^{くのれんこうじいせき}遺跡でも古墳時代の土坑が発見されているため、これらの遺跡の分布状況から古墳時代後期の人々は諏訪ノ原丘陵東南麓に集落を作っていた可能性が高いと思われます。ここに暮らしていた人々は、おそらく諏訪ノ原丘陵の古墳を造ることに関わっていたことでしょう。

また、諏訪ノ原丘陵からはやや南に離れますが、小田原市立病院周辺に位置する久野下馬下^{くのげばしたいせき}遺跡では、古墳時代中期の土器集中遺構が発見されています。この遺構は河川祭祀に関わるものと考えられていますので、古墳時代の人々が諏訪ノ原丘陵の東南麓にムラを、丘陵上に墓域を、そして久野川流域を生産の場として生活していたもの



第10図 久野多古境遺跡第Ⅰ地点全体図 (1/400)

と想定できます。

このような土地利用は、奈良・平安時代にも引き継がれます。前述した市道0036号線の調査においても、奈良・平安時代の遺構や遺物はほとんど見つかっていません。古墳時代後期に豪族達の墓が造られたという丘陵の聖域性は、奈良・平安時代の人々も認識していたのでしょうか。



写真25 久野多古境遺跡第Ⅰ地点出土鉄滓・羽口

2 奈良・平安時代のくらし

奈良・平安時代には、律令制に基づく行政区分がされていました。諏訪ノ原丘陵一帯は、相模国足下郡飯田郷の一部と考えられています。

久野多古境遺跡第Ⅰ地点の発掘調査では、平安時代の鉄鍛冶に関する遺構が見つかります。この遺構は楕円形土坑で、北側には焼けた河原石が据えられていました。また、掘り込みの中には鉄滓が



写真26 久野多古境遺跡第Ⅰ地点出土鉄製品

は、掘り込みの中には鉄滓がたくさん詰まっていた。関連する遺物として、靴の羽口（写真25）や、よく使われて磨り減った砥石も見つかります。これは、久野多古境遺跡の集落の中で小鍛冶が行われていた証拠です。鉄製品の修理や再利用品の製作は、集落の鍛冶屋が行っていたのでしょう。

なお、多古境遺跡の住居跡からは、地元で生産された土器のほかに、他地域から持ち込まれた土器も見つかります。古墳時代後期の住居跡からは駿河東部で作られた土師器甕や浜名湖周辺で焼かれた須恵器が出土していますし、奈良・平安時代の住居跡からは「甲斐型坏」とよばれる甲府盆地産の土師器坏や、武蔵方面で焼かれた須恵器が出土します。出土遺物の違いから、時代によって交易を行っていた相手が異なることがよく解ります。

Ⅶ 中・近世の遺跡

1 三筋壺にみる「多古一得名」

諏訪ノ原丘陵では、これまでのところ大規模な中・近世遺跡は確認されていません。しかし、丘陵南麓に位置する久野多古境遺跡第Ⅰ地点では、三筋壺と呼ばれる壺が完全な形で出土しています。三筋壺とは、胴部に3本の沈線が巡る壺で、^{きょうてん}経典を納める^{きょうづつ}経筒や^{ぞうこつ}蔵骨器（骨壺）として用いられることの多い壺です。小田原市内では久野多古境遺跡と下堀宮ノ脇遺跡の2遺跡でのみ出土しています。

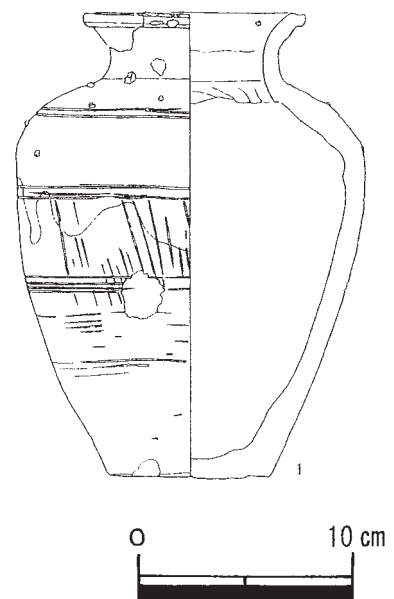
出土した三筋壺は^{とこなめ}常滑窯（愛知県常滑市周辺）で焼かれた製品で、平安時代末期（12世紀後半）に作られたものです。周溝が巡る1号塚の中央付近から出土し（写真27）、河原石によって蓋がされた壺の中には火葬された人骨が充填されていました。このことから、この三筋壺が蔵骨器として用いられていたことが解ります。

文献資料によると、この辺りには鎌倉時代に「^{た こいつとくみょう}多古一得名」という名があったことが解ります。一得名は、^{やまのうち す とう し}山内須藤氏という鎌倉幕府の有力御家人の領地であり、久野多古境遺跡周辺に有力な武士団が存在していたことが解るのです。他地域で生産された貴重な三筋壺に納められた^{か そうこつ}火葬骨は、この辺りを治めた有力者のものと考えられ、両者に何らかの関連性があることを想像させてくれます。

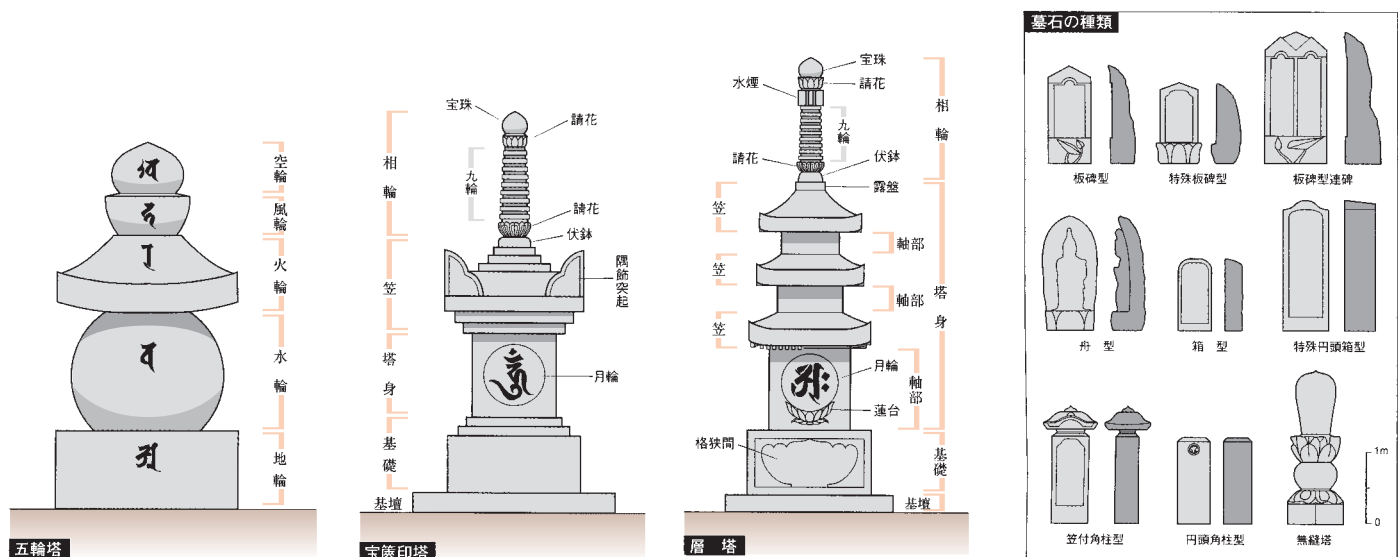
また、久野多古境遺跡から西に400mほど離れた久野山神下遺跡では、13世紀～16世



写真27 久野多古境遺跡第Ⅰ地点三筋壺出土状況(南から)



第11図 1号塚出土三筋壺(1/5)



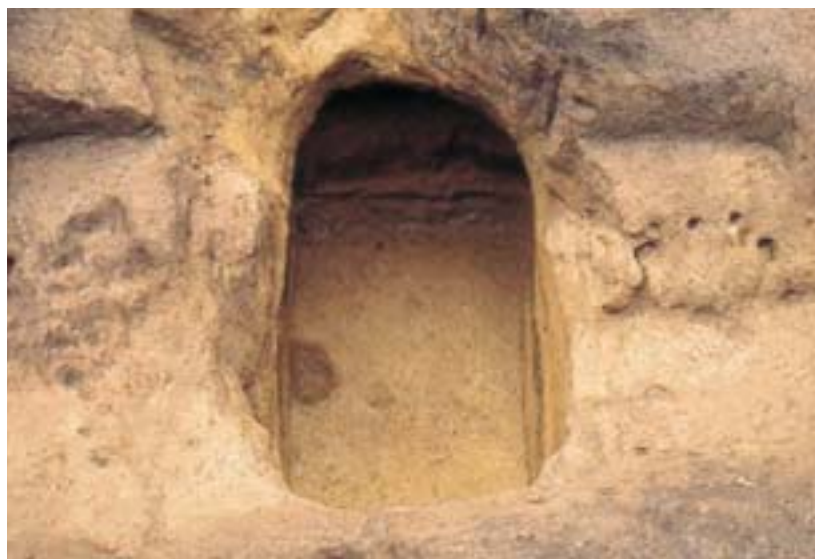
第12図 石塔の部位と名称 (石井ほか2001より)

紀の遺物が出土し、掘立柱建物跡が見つっています。同様に久野蓮光地遺跡でも12世紀～13世紀の遺物が出土する井戸が確認されていますので、諏訪ノ原丘陵南麓に中世前期の有力者がいたことは間違いのないことと思われます。

2 戦国時代の遺跡

諏訪ノ原丘陵西端に位置する総世寺^{そうせいじ}は、小田原北条氏以前の小田原城主であった大森氏と縁の深い寺院です。境内には市指定重要文化財となっているカヤの木が茂り、大森氏頼の供養塔や五輪塔・宝篋印塔^{ごりんとう ほうきょういんとう}の残石が往時の面影を伝えています。

このような、五輪塔・宝篋印塔の断片は、様々な場所で見られます。これらの石塔は、墓というよりも供養塔としての意味が強いものです。諏訪ノ原丘陵上にこのような石塔類が分布する様子は、縄文時代以来変わらず丘陵上を葬送地として使う風習が継承されていたことを想像させます。なお、総世寺には寺宝^{じほう}として羽柴秀次^{はしばひでつぐ}寄進^{きしん}の梵鐘^{ぼんしょう}なども伝わっています。



ほかに、諏訪ノ原丘陵周辺で発 写真28 久野多古境遺跡第Ⅳ地点検出地下式坑 (南から)

見された中・近世を代表する遺構としては、地下式坑ちかしきこうと呼ばれる遺構を挙げることができます。地下式坑は全国で約5,500基確認されていますが、その大半は関東地方に所在します。小田原市内では20基のみ確認されていますが、久野多古境遺跡には、そのうち7基が集中しています。今のところ倉庫として使われたという考え方と、墓であったとする2つの考え方が主流ですが、その用途については解っていません。

さて、前にも述べましたが、諏訪ノ原丘陵には「城蹟」があったということが『新編相模国風土記稿』に記されています。天正18年（1590）に北条氏政・氏直と豊臣秀吉が戦った小田原合戦の際には、丘陵の東端部（白山中学校東側付近）に徳川家康・織田信雄おだのぶかつが陣場を置いていたことが知られています。徳川家康は、初めここに陣を張りましたが、織田信長の次男織田信雄が入ると、今井村（小田原市寿町）へと移動します。寿町の徳川家康陣場には、土塁や堀の名残が今も残っています。

また、昭和59年（1984）の試掘調査でも大規模な堀の痕跡が確認されています。堀は丘陵の尾根に沿って掘られていたことが解り、久野丘陵上には何らかの城郭施設が作られていたものと考えられます。

今のところ明確にはできませんが、『新編相模国風土記稿』にある「城蹟」とは、豊臣秀吉を迎え撃つ北条氏が造った砦、あるいは豊臣方が造った小田原城を包囲するための施設であった可能性が考えられるでしょう。

3 近世の遺跡

近世の遺跡としては、久野北久保上遺跡で井戸などが見つかっています。井戸には排水等に使用されていたものと考えられる溝状遺構が伴っていました。同様に、排水用・耕作用に用いたと考えられる溝状遺構やピットなどは各所で散見されます。

また、久野坂下窪遺跡の調査時には、久野1号墳の墳丘上で多数の写経石しゃきょうせきが確認されています。写経石とは、石1つ1つに経文を書いたもので、経塚などと同様の役割を持つものです。この写経石は近世初頭のものと考えられており、久野1号墳が江戸時代になっても塚として信仰の対象になっていたことが理解できます。

このように、諏訪ノ原丘陵には15,000年前の縄文時代から現代に至るまでの間に、様々な人々が生活を営んでいたことが解ります。遺跡は、それらの記憶を私達に教えてくれているのです。

引用・参考文献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした文献などを掲載しました。諏訪ノ原丘陵周辺の遺跡をさらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- | | | |
|---------|------|---|
| 石井 進ほか | 2001 | 『石仏と石塔』文化財探訪クラブ8、山川出版社 |
| 小田原市 | 1995 | 『小田原市史』城郭編、小田原市 |
| 小田原市 | 1998 | 『小田原市史』通史編 原始古代中世、小田原市 |
| 小田原市教委 | 2001 | 『小田原の文化財』、小田原市教委 |
| 小池 聡ほか | 2004 | 『久野山神下遺跡第Ⅴ・Ⅵ地点 中村原前畑遺跡第Ⅱ・Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第122集、小田原市教委 |
| 小池 聡ほか | 2004 | 『久野北側下遺跡第Ⅱ・Ⅳ・Ⅴ地点 久野北久保下遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第123集、小田原市教委 |
| 小林義典 | 2003 | 『久野北側下遺跡第Ⅰ地点 久野北側上遺跡第Ⅰ地点 久野北久保遺跡第Ⅱ・Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第114集、小田原市教委 |
| 小林義典 | 2004 | 『久野多古境遺跡（第1分冊—第Ⅰ・Ⅱ地点—）』小田原市文化財調査報告書第120集、小田原市教委 |
| 斉藤 忠ほか | 1953 | 『小田原市 久野諏訪の原古墳調査報告』小田原市教委 |
| 佐々木健策ほか | 2000 | 『久野多古境遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第79集、小田原市教委 |
| 諏訪問順ほか | 2005 | 『久野蓮光地遺跡第Ⅰ地点』小田原市文化財調査報告書第131集、小田原市教委 |
| 諏訪問順ほか | 2007 | 『久野蓮光地遺跡第Ⅱ地点』小田原市文化財調査報告書第140集、小田原市教委 |
| 諏訪問順ほか | 2007 | 『平成15年度試掘調査（2） 谷津山神遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第142集、小田原市教委 |
| 塚田順正ほか | 1985 | 『久野坂下窪遺跡』小田原市文化財調査報告書第16集、小田原市教委 |
| 坪田弘子 | 2004 | 『久野諏訪ノ原遺跡第Ⅲ地点』小田原市文化財調査報告書第126集、小田原市教委 |
| 戸田哲也ほか | 2002 | 『久野諏訪ノ原遺跡群Ⅰ』小田原市文化財調査報告書第101集、小田原市教委 |
| 山内昭二ほか | 1981 | 『小田原市久野諏訪ノ原清掃工場建設予定地遺跡発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書第11集、小田原市教委 |
| 山内昭二ほか | 1996 | 『久野第2号古墳』小田原市文化財調査報告書第58集、小田原市教委 |

小田原の遺跡探訪シリーズ2

久野諏訪ノ原丘陵の遺跡

—久野古墳群と周辺遺跡—

平成19年3月10日 印刷

平成19年3月15日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1717

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp

印刷 株式会社アルファ

